



西中だより

学校教育目標

志を持ち 自ら学ぶ 健康でたくましい生徒

県下に誇れる西中を



桶川市立桶川西中学校
令和4年10月24日
第8号



実りの秋から花咲く春へ

教務主任 今井 唯太

食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋、様々な言われ方をしますが、『秋』も深まってきました。10月8日には文化祭もおこなわれました。秋は文化的活動や芸術的活動などの発表の場も多くあり、桶川西中学校においても「実りの秋」になりました。また、数週間たつと少しずつ『冬』の景色になっていきます。皆さんもウィンドブレーカーなど防寒着を用意する時期になります。草花が枯れ、紅葉し落葉していく『秋』『冬』の季節を皆さんはどのように感じているのでしょうか。

さて、ここで『一色一生（志村ふくみ）』という書籍の一部を紹介します。志村ふくみさんは、絹糸を草木の自然染料で染め、織り上げて着物などをつくる染織家で、重要無形文化財保持者（人間国宝）の方です。

以前桜でもそういう思いをしたことがありました。まだ折々粉雪の舞う小倉山の麓で桜を切っている老人に出会い、枝をいただいてかえりました。早速煮出して染めてみますと、ほんのりした樺桜のような桜色が染まりました。

その後、桜、桜と思いつめていましたが、桜はなかなか切る人がなく、たまたま九月の台風の間でしたが、滋賀県の方で大木を切るからときき、喜び勇んでかけました。しかし、その時の桜は三月の桜と全然違って、匂い立つことはありませんでした。

その時はじめて知ったのです。桜が花を咲かすために樹全体に宿している命のことを。一年中、桜はその時期の来るのを待ちながらじっと貯めていたのです。

知らずしてその花の命を私はいただいていたのです。それならば私は桜の花を、私の着物の中に咲かせずにはいられないと、その時、桜から教えられたのです。

植物にはすべて周期があって、機を逸すれば色は出ないのです。たとえ色は出ても、精ではないのです。花と共に精気は飛び去ってしまい、あざやかな真紅や紫、黄金色の花も、花そのものでは染まりません。

友人が桜の花弁ばかり集めて染めてみたそうですが、それは灰色がかつたうす緑だったそうです。幹で染めた色が桜色で、花弁で染めた色がうす緑ということは、自然の周期をあらかじめ伝える暗示にとんだ色のように思われます。



志村ふくみさんについては、2年生の国語の教科書の『言葉の力（大岡 信）』という随筆の中で紹介されています。「どこかで聞いたことある話だな」と思った方もいるかもしれません。

『秋』から『冬』になります。実りの秋を越え、稲穂も刈り取られ、綺麗な花も、生き生きとした深緑も、鮮やかな果実も減っていきます。校内の桜も色づいて、落ち葉になっていきます。茶色の地味な景色が広がっていきます。日の沈むのも早くなります。寒くなります。大変な季節になりますが、その先には春が待っています。春になってから芽吹き花を咲かせるためには、じっと貯める時期も必要なようです。